
魔法を覚える十の方法

cod

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法を覚える十の方法

【Nコード】

N3778K

【作者名】

cod

【あらすじ】

突然不幸体質になってしまった主人公の元に、自分のことを神と
言う電波女が現れて (元)墮天使カトリーナ、彼女が主人
公と電波女の前に現れたことによって物語は怒濤の第一章へと突入
する

ブローグ・不幸です

突然ですが寝込んでます

ん？いきなり何報告してるんだって？ いちいち茶々はご無用。取りあえず聞いて下さい、俺の話を。

AM10時、俺はアパートの自室で寝込んでいる。

原因は多重にある。多重苦だ。

昨日のことだ。朝、俺は大学に行くため駅のホームにいた。そしてたら風が吹いて線路の上に落ちて間一髪で電車を避けたところで鳥のフンを頭に受けました。

だが、そんなことはどうでも良い、むしろ武勇伝だ。問題はその後だ。トイレで頭を洗って無事電車に乗った俺に腹痛と貧血と頭痛と筋肉痛がいつぺんに襲ってきました。

他のは良くはないが良いとして、筋肉痛って何だ。俺最近、全く運動してないんだけど。まあ良い、問題はその後だ。医者とかタクシーにお世話になった俺がアパートの鍵を開けて入ると畳に穴が空いて田中さんの部屋まで落ちました。

これは洒落にならない、田中さんいたら死んでたよ。しかも入り口の前、しばらく段ボール補強なんですけど。

というわけで、俺の生きる気力は昨日一日で無くなってしまった

わけだ。もう単位なんかどうでも良いとさえ思っています。ニート
でいいや、はは。あ、ちなみに朝起きたら何の前触れもなく虫歯に
なっていました

ピンポーン

誰か来たようだ。だけど俺は出ない。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピ
ンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポ
ンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピ
ンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポ
ンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

はっはっはっ、今度はどんなことが起きるのかな

俺は立ち上がりタンスの角に小指を当ててから、段ボールに触れ
ないように壁にへばりつきながらドアを開けました。

電波との出会い

「あなたは邪神ルシファーに取り憑かれています一刻も早く魔法を覚えないとあなたは死ん

ボタン

電波な人でした

ピンポン

はっはっはっ、開けませんよもう。

俺は鍵を閉め直して再び寢床に向かっ

バキッ、ガッ、スコーン

一応説明しますね、電波がドアを破壊して中に入って穴に落ちてしまいました、お終い

俺は再び寢床に

ズギヤーン

一応説明しますね、電波が穴から戻ってきました、お終い っとなるかああああああああ！！

電波は俺の一撃を見事に食らって倒れました、お終い……
まずい？

口が減らない電波さん

俯せに倒れてぴくりともしない電波、彼女の茶色のショートヘアは血に染まっている。

「やつ……やつちまったっ」

俺はバットを力なく放し、膝から崩れ落ちる。

いくら電波だからって、殺すことはなかったろう。

昨日からの不幸、その終着がこれか。

これが運命だと言うなら、俺は

「神を呪う」 「あなた風情に呪われる謂われはないんだけど」

「うおわっ!?!」

俺が顔を上げると、そこには血に染まりながらも美しい顔

「電波!」

「……取りあえずタオルを貰いましょうか……」

俺と、タオルを頭に巻き付け、礼儀を無視して靴を履いたままの電波は、ちゃぶ台を挟んで向かい合っていた。

「さっきも言った通りあなたは墮天使カトリーナに取り憑かれて

いますこのままだとあなたは救いようのない光もないサンシャインもないどん底な最期を送ってしまいますあなたが助かるには魔法を覚えるしかありません」

そこまで早口棒読みで言い切ると、彼女はほっと一息をつき、ちやぶ台に肘をついて

「何か質問ある？」

と普通の口調になって聞いてきた。

ありすぎてできない。

「取りあえず帰ってもらえますか？」

すると彼女はにやりと笑って

「あなたバカですか？そこにあるバットに付着した血痕とひしやげ具合を神奈川県警が調べれば一発であなた殺人未遂で捕まりますよ執行猶予はつくかもしれませんが世間からはゴッソリ

「分かりましたー！」

……何か気まずい。

あれから五分ほど、電波は俺を黙ってじっと見つめてきている。嫌がらせとしか思えない。

だから俺は彼女に何か質問でもすることにする。

「あのさ、」

「何？」

何故か気怠そうになる電波。だが俺はそのまま続けた、いや、続けてしまった。

「魔法って魔力とか必要なのか？」

「え？何？魔力？そんなものあるわけ無いじゃないですか頭湧いてるんですか？ファンタジー文庫の読み過ぎですかあなたは現実と二次元の区別もつかないゴミなのですか？」

薄ら笑いを浮かべながら、暴言を吐き続ける電波。

「これだから社会のゴミもとい人間界のゴミは困りますねーほんと私の爪の垢でも煎じて飲みますか？ほら跪いて靴をお舐めこの力ス野郎」

電波の投げた靴が俺の頭に当たった。

はっはっはっ、死ね

その後俺は、神の名を騙る電波を荷造り用のひもで楽々縛り上げました。ってか弱！

「まさか成人間もない女性を拘束する趣味があったとはね、私とされたことが飛んだ不覚だわ」

寝っ転がってる電波が、何か言ってるが気にしな〜い。俺は人間として終わってるやつに、何を言われても気にならないんだ。

「あなたは何様のつもりですか貴公子ですか？監禁王子ですか？調教したい年頃なのですか？あなたみたいな輩がいるから日本に児童ポルノが蔓延するのよこの鬼畜」

黙れ

「ぎゃああああ！青汁うっうっうっ！?!？」

母さんが毎週送ってくる特性牛乳入り青汁を、ペットボトル（大）ごと電波の口にぶち込んでやりました

「呪ってやるわ！呪ってやるわよ！」

良く喋れるなあ

ドババババババ

「ごばばば！！すびばせんすびばせんすびまへん！わだしが悪うっごじゃいあしたー！！」

謝ったところで、ペットボトルを取ってやることにする。

良い感じに青くなっただな〜。顔が。

「ま、まさか神であるこの私が人間風情に敗れるとは。いくら私
が玄関でのやりとりで力を使い切ってしまうほどの至上最低最弱な

神だということをし差し置いてもあり得ないわ」

何か可哀想になってきた。

「さてはあなたすでに覚醒してるわね！騙してたわね！このド畜生が！」

最弱な上に頭までトチ狂ってるとは、救いようがない。

「な、何よ、その、どうせ肉食なのに背伸びしてベジタリアンって言ってるでしょーって目はー！！！！」

取りあえず、うるさいので口にガムテープ貼っというた。

元墮天使カトリーナさん登場、知らぬ間に事態はとんでもないことになっていた。
電波が俺の前に現れてから一週間経っていた。

「スリップストリーム！」

「甘いわ、甘いわ！私もストリーム！」

あれから電波は毎日昼になると、日に日にぼろぼろになってゆく俺の前に現れて、一緒にレーシングゲームをするようになった。

「あ、そこにあるみかんとって」

「わかった……はいなっ」

「ありがとうー」

「どういたしましー」

そう、俺と電波は友達になっていた。

「にしてもお前早口無くなったなー」

コントローラー操作しながら包帯巻きすぎてミイラな俺。

「だって友達だもんー」

コントローラー操作しながら上下黒のジャージに身を包んだ電波。

「そうかー」

「そうよー」

ブーン

ブーン

ブーン

ブーン

「君たち何をまったり」

スコーーン

「何か音したかー？」

「気のせいじゃないー？」

「そうかー」

「そうよー」

ブーン

ブーン

ブーン

ブーン

ズツギャー！ー！ー！ー！

どうやら俺の出番が回ってきたようだ、説明しましょう。何かもの凄い音がして、俺たちの前に十歳ぐらいの金髪少女が現れました。

「あああ！ー！画面が見えない！見えないわよ！ー！」

叫ぶ電波。俺も同意だ。

「おい、俺たちの静かながらも熱いレースを邪魔すんな。今良い所なんだ」

それを聞いた少女の肩が、わなわなと震える。

「君たちわっ！何を寝ぼけたことを言ってるんだっ！ー！」

ブツーン

「ああ！ー！」

なんと少女は、コンセントからゲーム機のコードを引き抜いてしまった。あ、熱きバトルが……………

「……………許さないわよ許さない……………」

何かぶつぶつ言って立ち上がる電波。

「でんげきでんでん電撃電電！ー！」

「うわあああんっ」

(元) 堕天使が俺に泣きついてきた。俺も傷にしみて泣きそうです(泣)

「よしよし」

心優しき俺は彼女の頭を撫でてやる。

「……………ぐすっ」

何だ、人外と言うことを除けば普通の「ロリコンが」

俺が和んでいると電波が言ってきました。

くそう……………否定したいがこの状況では……………

電波は(元) 堕天使の方を見据える。

「それであなは何をしに来たのですかまさかその鬼畜で外道でno goodな男におお兄ちゃんって言いに来たわけではないですよね」

俺は心の中でやつとの友達契約を解除した。

「……………グスン……………」

落ち着いた彼女が俺から離れる。

そして真っ赤になっているその目で、強く電波を見据える。

「どうもこうもないっ、君が任務をサボり続けたおかげで天界わメチャクチャだっ。地獄と繋がったり、人間界にも繋がりがけてるんだぞっ」

よく分からないが、何かすごいことになってるらしい。

それを聞いた電波があくびをする。おい。

「何か大神様から言いつけられたけど、めんどくさいし、ぶっちやけたところ世界がどうなったって私には関係ないのよねー」

口調を元に(?)戻した電波がほざきやがった。

電波だ、やっぱりこいつはただの電波だ。

「関係はっあるっ」

(元)墮天使が腕をピンと地に向けて言った。

「へーどんな風にー?」

「君にもっ取り憑いているっ」

「は?」

「だから君にも取り憑いているんだよっ」

それを聞いた電波は黙って目を瞑り、そして「うわあああああ
あ!」叫んだ。

電波は（元）墮天使に駆け寄り、地に膝をつき彼女の肩に掴まる。

「ごめんなさい私神とか言ってますけど実は毎日仕事サボって人間界に入り浸ってたんですだからぶっちゃけた話知識なんてほとんど無くてどうやって憑きものを追い払うかなんて詳しいことは分からないんですどうかこの哀れな

「だっ黙れっ」

俺の目の前には、目が虚ろな電波とそれを気味悪がる（元）墮天使。

よく分からないがこれだけは言える。

プロローグは終わったのだ、と。

第一章・魔法を覚える十の方法

”憑きもの”これが俺と電波に憑いているものの名、何かそのまんまだが。

”憑きもの”は長い時間をかけて、人間界に溜まった負のエネルギーのことで、ほっとくと世界の規律が崩れてしまうらしい。それで、いつも天界から人間界に神様が来て消してたらしいんだが、今回は見つける前に俺に憑依してしまったようで、こんなことは初めてだと、神様たちが大急ぎで電波を寄越した。

だが、悲しきことに電波は電波だ。やつは俺と遊んでる間に負のエネルギーを吸収してしまったらしい。ただの馬鹿だ。

つまり、俺が今ミイラのように包帯ぐるぐる巻きになっているのは、”憑きもの”と電波のせいだ。マジ腹立つ。

ちなみに天界の連中は地獄と空間が繋がりだしてから電波のサボりを知ったらしい。そしてカトリーナを送り出したとき、めでたくない、めでたくない。

「わっ分かったっ？」

今俺に応答を求めたのはカトリーナ、元墮天使で金色のロングヘアが印象的な可愛らしい少女だ。

「は」

そう吐き捨てたのは電波、茶色のショートヘアで見た目二十歳の電波だ。

ちなみにやつに下手なことを言っと（言わなくても）、突然、早

口・敬語・棒読みモードに入るから要注意だ。かなりうざい

そんな感じの俺たち三人は今、ちゃぶ台を囲み合っている。

そう、俺と電波はカトリーナの話聞いていた。だが電波は身を
わきまえてないのか、ずっと欠伸をかいていた。マジ死んどけ。

「どうやらやつは”憑きもの”を追っ払う方法にしか興味ないらしい。」

「あ……う……」

カトリーナの目が潤む。どうやら彼女は気が弱いらしい。電波の
こと何て気にしなくて良いのにな。

「良く分かったぜ！」

俺は軋む親指を無理矢理立てて、カトリーナに答えた。

「よっ良かったっ」

「墮天使！」

その後、俺は十分ほど彼女に謝り続けた。

すみません出来心です。

そして再びちゃぶ台にて、

「君わ絶対に外に出ちゃ行けないっ」

カトリーナさんが俺に対して言ってきました。

「えつと、ごめん」

まだ機嫌が直ってなかったのだろう、俺は素直に頭を下げる。

「っ！ちつ違っつ！八つ当たりじゃないっ」

目の前でぶんぶん手を振るカトリーナ。じゃあ何だ。

すると電波が口を挟む。

「あなた馬鹿ですかそんなミイラな格好で外に出てハリウッドホ
ラースカウトキャラバンにでもスカウトされるつもりですかこの死
に損ない」

これが、早口・敬語・棒読みモードだ。何か聞いてて鬱になって
きた。

「ちつ違っつ、そうじゃないっ」

頂垂れる俺を見たカトリーナが慌てる。

ふ………慰めはいらないぜ。

「君にわそのっ”憑きもの”の負のエネルギーが結構大きくなっ

ていてっ、だから君が外に出てちょっとでも人間に触れてしまったら……………」

急に押し黙るカトリーナ。

「触れてしまったら？」

嫌な予感しかしないが、これは聞いておかなければならない。

言いづらそうにするカトリーナだったが、ついに意を決すと、背筋をぴんと伸ばしこう言った。

「君に触れた人間わ……………死ぬっ」

ぬうあにいいいいいいいい！！！！

「じゃっ、じゃあ俺は一生外に出れないのか！？この体が朽ち果てるまで！！！！」

「えっとその……………ぼ、僕にわ触れるよっ」

「全然解決になつて無ええええええ！！！！」

絶望の淵に立たされた俺に対し、同情の眼差しを向けるカトリーナ。

そしてにやける電波。ちょっと待てええええええええええい！！！！

「何でお前は笑ってるんだ！！お前も同じ状況のはずだろうがあああ！！！！」

俺の叫びを聞いてなおにやける電波。腹立ってきた！

「あなた馬鹿ですか？さっきは取り乱してしまいました但仮にも私は神ですよ実際あなたのようなぼろぼろのずたずたつまりぼろずたにもなっていないしゃっぱり元が

「同じだよ」

らしいです。

電波が驚愕の表情でカトリーナを見つめる。

カトリーナは目をそらして言う。

「きつ君わっ確かに神けどっ、その……割と……力が無いじゃないか。体に影響が出てないのはその人に比べて取り憑かれたのが割と最近だからで、影響が出始めたら進行は速……きゃっ」

「私風情が生意気言って申し訳ございませんでした私はあなた様に忠誠を誓います大神様は魔法を使えば治るとか言っつて詳しいことはためえそれだけ言えば分かんたろっつて感じて教えてくれませんでしたしあなた様しか頼りはいないのですつきましては

カトリーナの肩を掴んだ電波が虚ろな表情で懇願し続けている。
下手なホラーよりよっぼど怖い。

「わっ分かつたっ教えるからっ、はっ放せっ」

それを聞いた電波が目を輝かせ素早く手を放し、ガッツポーズをする。変わり身早ええ。

其の一 腹式呼吸(1)

「おっ起きてっ」

「う、うーん？」

誰かの声で目を覚ます。

ゆっくりと目を開けると、そこには金髪の少女。

「この子は……………」

「誰だ？」

「へっ？」

きよとんとする少女。

ま、まさか…………いや、間違いないだろう

「ごめんなさい」

俺は土下座をする。

「えっな、何でっ？」

俺は畳に頭をこすりつけながら、謝罪の言葉を述べる。

「ごめんなさい昨日の記憶がまったくくないんです。察するところ

によると不幸に成り果てた俺が無意識のうちにあなたを部屋に連れ込んだのでしょっ自首します自首します自首します自首します

「ちよっちよっつ、神みたいな喋り方しないでっ」

自首します自首します自首します自首します自首します自首します
自首します自首します自首します自首します自首します自首しま
す自首します

「うわあああんっ」

後にカトリーナから聞いた話によると、その時の俺の姿はまるで
怨念のようだったらしい。

そして今はAM十時。

カトリーナの涙と引き替えに記憶を取り戻した俺は、彼女と一緒に
にちゃぶ台の前に座って、お茶を飲んでいる。ちなみに電波は、ま
だしばらく外に出ても大丈夫だと知ると、何の迷いも無くゲーセン
に行ったらしい。馴染みすぎだろ。

「所で特訓で何すんだ？」

俺は目の前で、お茶を一生懸命冷ましている元墮天使に聞いた。

彼女からさっき聞いた話によると、俺を不幸にしながらどんどん
でかくなる”憑きもの”を払うには、洗淨魔法、浄化清々というの
が必要らしい。子供の夢をぶっ壊すようなネーミングセンスだと思
った……………。

まあとにかく、その浄化清々というのは、内から邪気を消化する

魔法で、他人からかけて貰うことはできないらしい。だからこの俺が、魔法を覚えるための十の方法とやらをマスターして魔法を覚えるという、よく言えばファンタジック、悪く言えば電波な展開になったわけだ。

俺の言葉を聞いたカトリーナは、一旦湯飲みを置いて真剣な顔を見せた。

「そうだね……神がないから、あの人がマスターしている方法の中で簡単なのからいこうっ」

「どんと来いっ！」

と、言うわけで、俺は天井が見えるよう仰向けになって、明日カラオケに役立つという腹式呼吸の訓練をしている。

「何でじゃあああああああ！！！」

「うわっ？」

カトリーナが驚いた顔でこっちを見る。

「何だよ腹式呼吸って！魔法と関係あるようには思えない！あと、大きい声出しすぎて骨が痛ええええええ！！！」

俺がのたうち回ってまたそのせいでのたうち回るといふ馬鹿な状況を繰り広げていると、カトリーナが、天使の力だろうか、その細い腕で体を止めて背中をさすってくれた。

その状態の俺がありがとうと言えるはずもなく、泣きながら必死

に痛みを耐えていた。

其の一 腹式呼吸(2)

「まっ魔法を使うにわ体を流れる気の流れが重要なんだっ。だから呼吸の方法も大切なんだっ」

「……………」

俺はカトリーナの説明を、屍のようにぐったりした状態で、彼女に抱えられて聞いていた。ぶっちゃけ殆ど頭に入っていない。それほどまでに俺は、屍だった。

「わっ分かったっ？」

彼女が聞いてきた。

「わ、分からない……………」

息も絶え絶え。そんな俺の屍っぷりを見た彼女は、少し戸惑ってから

「えっと、少し休もうかつ」

と言ってくれた。

俺はもちろんそのお言葉に甘えることにした。

と、言うわけで俺は布団をかぶりながら、腹式呼吸の練習をさせられている。な、なんですかー？

俺がそう、弱々しい眼差しで訴えると、カトリーナは真剣な顔で、

「じつ時間は逃げていくんだよっ」と言ってくれた。

カトリーナはスパルタだと言うことが判明した。

しばくすると、体力は回復してきたが、中々腹式呼吸が思うようにできない。

「なあ、何かこつとか無いのか？」

布団に寝っ転がっている俺。

「こっ……」

俺の横に座って腕を組むカトリーナ。

彼女は少し考えた後、「良しっ」と言っ立ち上がった。

俺がそんな彼女を見ていると、彼女は手を差し出して

「君も立ってっ」と言ってきた。

「ん、分かった」

俺が彼女の手を掴んで立つと、彼女はそのまま俺の手を自分の腹に

「ちよっちよっ待った！」

「何っ？」

そうこうしていると、俺のぼろ切れに変わり果てた脚に限界が来た。

「きゃっ」

手を引つ張られた続けた俺は、カトリーナにぶつかり彼女と一緒に倒れ、押し倒す格好になった。

そしてその時

「今度は」

聞き慣れた声が

「ミイラプレイですか」

した。

俺が声のした方、つまり入り口の方を見るとやっぱり

「お、大家さん」がいました。

「またまたやってくれたわね、このロリコンが」

止めるおおおおおおお！！だからそのゴミでも見るような目で見るなああああああ！！

「家賃の徴収に来たらこれですか。今度は許しません、あなたにはこのアパートから出て行って貰います」

大家さんがそう言って、黒のロングヘアを、ふあさふあさ揺らしながら俺の方に近づいてきた。

来んなああああ！俺に触れたら死ぬぞおおおおおおお（マジ）！！

そのことを一番良く分かっているカトリーナが、慌てて何か言い始めた。

良いぞ！なにかフォローを

「ろっ、ろりこんで何が悪いっ」

シン……

その場に永遠とも思われる沈黙が訪れた。

俺と大家さんは固まり、カトリーナだけがきよるきよるしている。

やがて、五分だろうか、十分だろうか、もっとだろうか、時間が経ったとき

「あ、ああ……合意の……お、お邪魔しましたー」

大家さんはそう呟いてそそくさと立ち去っていった。

大家さんが出て行くと、いまだ俺の下になっっているカトリーナが笑顔になった。

「なっなんか知らないけどっやったっ」

「あ、ああ。やっちまったな」

「この日はもう寝込もう、泣きながらそう思った。

其の二 逆立ち(1)

「逆立ちをするんだっ」

精神的ショックを受けて寝込んでる俺に、カトリーナさんが言ってきました。

「無理」

俺はそう言っただけで布団に潜る。

「起きてっ。無理じゃないっ」

そう言っただけでカトリーナは俺の布団をはぎ取った。

「無理に決まってるだろーが。どうせ俺は社会のゴミですよ」

やさぐれた俺は畳に寝転がり続ける

「殺すよ?」

ゾク

とんでもなく殺気のコもった声に振り向くと、カトリーナさんが笑顔で俺を見つめてました。

ゴゴゴゴ

というか睨んでました。

「逆立ち、します」

「魔法を使うためにはバランス感覚を養うことも大切なんだっ。そのためには逆立ちが効果的っ」

俺はカトリーナの説明を、何もしていなくても軋む骨の痛みに耐えながら座って聞いている。窓から漏れる日の光が眩しいぜ。

「聞いているっ？」

カトリーナが、目を細めて窓の外を見ている俺に対して聞いてきた。

「……というか、多分このまま逆立ちなんかやったら死ぬんだけど」

いろんなところが碎けそうだ。

「それもそうだねっ」

ええ、そうです。

「分かったっ」

そう言うとき彼女は目を瞑って人差し指を立てた。

何だ？回復魔法でもかけてくれるのか？

「ぶつぶつ……」

呪文を唱えているのだろう。彼女は小声で何か言い始めた。これは期待できそうだ。

「良しっ」

すこしすると、彼女は笑って俺の方を見てきた。

「成功か？」

「うんっ」

頷く彼女。

確かに痛みが軽くなった気がする。何だよ、初めからこれをやってくれば良かったのに。

浮かれた俺は逆立ちをしようと勢いよく立ち上がり右脚裏に内在するアキレス腱を痛めてのたうち回りました。

「う、嘘つきやがったなあ」

さつき同様、カトリーナの腕の中で必死に痛みを耐えた俺は、抱かれたまま彼女を睨みつけた。涙で視界が霞む。

「っ！しっ心外だなっ。僕わ嘘なんてついてないっ」

あたふたと瞬きを何度も繰り返すカトリーナ。

その動作は俺の言葉を肯定してるように見えた。

「お前……」

自分でも驚くほどの冷めた声が出た。

「えっと、その……」

どもる彼女を見て俺は確信した。

「俺は、もう誰も信じられない」

「えっ？」

驚く彼女を無視して、俺はその腕から離れようとする。

何かをすると、いや、しなくても知らぬうちにぼろぼろになってゆく日々。そんな中でカトリーナの存在はただ一つの希望。出会ってまだ一日だが、俺は一生懸命色々なことを説明してくれる彼女の死にたくもなるほどの痛みを無視して。

俺は彼女から離れようとするが、のたうち回って疲弊した体が言うことを聞かない。

「放してくれ……」

「だつだめっ」

俺の言葉を聞いた彼女はそう言ってさらに抱き寄せ、頭を俺の後ろに回した。

「……放せ」

そう言っても彼女は俺を抱きしめ続ける。

「お願いだから、放してくれよ」

そう言う俺の声は情けないほど震えていた。

俺は、極限状態だったのだろう。知ってはいたが、これほどまで

だとは思わなかった。俺は今、本当に死にたい。

彼女は俺の声を聞いてなお抱きしめ続ける。それに対して怒りは湧いてこない。虚しさと悲しみが募るだけ。

どれくらいそうしていただろう。俺の目からは涙が流れ続け、俺を抱きしめるカトリーナの体も震えている様に感じる。

そんなとき、がちゃりとドアが開けられる音がした。

「ただいま帰ったわ」

其の二 逆立ち(2)

ガサツ

俺の頭に何か投げつけられた。

「たつく。何二人でいちゃいちゃしてんのよ！気分悪い！」

何事かと思つて顔を上げてみると、電波が俺とカトリーナの横をズンズンと通り過ぎ、テレビの前に座つた。

「良いとこだったのに！あほんだら！」

彼女はそう言つと、ゲーム機の電源をつけてコントローラーを荒々しく構えた。

何だこいつ？

彼女の奇行のおかげで、いつの間にか涙が止まっていた目に、すぐ側に落ちているビニール袋が入つた。

「何だ……これ？」

俺が不思議に思つてそう言つと、電波が顔を顰めてこつちに振り返つた。

「今、何て言つた？」

彼女は画面内で車がクラッシュするのも構わず、そう聞いてきた。

「いや、何だこれって……」

俺がそう言うと、彼女はコントローラーを落とし、体をわなわなと震わせた。

「クウワトリーナー……!!!」

彼女はそう叫ぶと、顔を俯かせて今だ俺を抱きしめるカトリーナの前に高速で移動し、指をさして早口で何か言い始めた。

「あなた言いましたよね痛みには耐えかね発狂に発狂を重ねたその下郎が私がゲーセンでとてつもないバトルを繰り広げているにもかかわらず痛み止めを必要としていると大体テレパシーなんかで話しかけてこないでくれますあれ頭が痛いんですよとにかく律儀にもゲームを中断してまで買ってきた私の苦労はどうなるんですか一億は下らないですよ買って下さいこの堕天使が」

そう言い切ると、彼女は「寝る!」と言って布団の中に潜って行った。

電波はどうでも良いが、彼女の言葉が頭に引っかかる。

テレパシー？痛み止め？

俺はもしかかしてと思ってカトリーナの後頭を見た。

「もしかして、さっきの唱えてた魔法みたいのって、電波に俺の痛み止めを頼んでくれたのか?」

俺の問いに、彼女の体がびくんと反応した。

そして、彼女は少し頭を頷かせて

「……………うん」

と言ってくれた。

何てことはない。

全ては俺の勘違いだったのだ。今まで散々泣いてたことが恥ずかしい。

「えーと、その……………ごめんな」

「え？」

俺の言葉に反応して彼女は顔を上げた。

向かい合ったその顔は、涙で濡れていた。

「俺…………勘違いしてたんだ。苦しくてさ…………その…………ごめん」

他人であるはずの俺に対して、真面目に接してくれるカトリーナ。そんな彼女を疑ってしまったことが本当に恥ずかしい。挙げ句泣かせてしまった。

「……………うっん」

俺の言葉を聞いた彼女は、首を振ってそう言っていると、俺に対して笑って見せた。

俺はその時、彼女は本当に天使なのだ、と思った。

「そこ！のろけてんじゃない！」

本当、どっかの電波とは大違いだよ。

挿話 少女と運命（1）

果てしなく闇が広がる洞窟で、少女は泣いていた。

彼女は地面に蹲り、服や体が汚れるのも厭わなかった。

親友を、失ったのだ。初めて出来た友達。

少女は自分を責める。彼女の命が消えてしまったのは自分のせいだ、と。

闇が心にまで広がってくる。光は親友の死とともに消えた。

だけど、それではいけない。

泣いて泣いて泣きはらした。

体中の力は抜け、立つことなど出来ない。

それでも、彼女は自分のせいで死んだ親友のため、顔を、何とか上げた。

そして、強く、赤くなつた目を向けた

人間界の方へ。

其の三 食生活

あの後、電波が買ってきた痛み止めを飲んで一旦休憩となった。と言うか、思ったんだけど、痛み止めを飲んでも体が丈夫になる訳じゃないよな……………

まあ、それはともかく今は夕食どきだ。

「肉は食べちゃいけないっ」

元墮天使様が痛み止め効かずな俺と、やっとふて寝から目覚めたぐーたら電波に向けて言ってきました。

「あなた何を言うんですかそんなんでまほ……………な、何でもないですはい……………」

早口・敬語・棒読みモードに一旦入った電波をカトリーナが睨みつけた。子供とは思えない圧力。俺もちよつとだけ震えたぜ。

「氣の流れわ食生活にも影響を受けるっ。ちゃんとした魔法を覚えるまで肉は邪魔だっ、できるだけ野菜とか穀物中心の食事を取るんだっ」

「で、でも私肉がないと……………」

「師匠の言うことわ絶対」

「はっはい」

天使に従う神。ぶつちやけ訳分からんが、カトリーナが怖いと言うことだけは良く分かった。

そんなこんなで、今までネットカフェやらカプセルホテルやらで過ごしてきたという、電波を交えた俺たちの、きわめて健全な食生活が始まることになった。

「今回はひと味違うわ、違うわよ!」

俺と、そろそろ”憑きもの”の影響が出始めるだろう電波は、外に出ると色々やばいので、カトリーナに買い物任せ、レーシングゲームで遊んでいる。

「な、何だと、俺のゴーストを抜くとは……………お前、腕を上げたな」

電波がタイムトライアルで最高タイムを出そうとしている。お、俺の一年が、こんなやつに。

「ゲーマーは伊達じゃない、伊達じゃないわよ!」

ああ、ついにゴールしちまった。む、無念

電波がこっちを向いてきた。

「もう私は超えられないわ、超えられないわよ!」

「ち、治ったら、見てろよ」

「望むところよ、望むところなのよ!」

そう言いながら、電波が手を差し出してきた。

ふ、良いところあるじゃないか。だが

「気持ちだけ受け取っておくぜ、手を握ったら恐らく骨が折れるからな」

「……………ちっ」

「てめえ、最初から折るつもりだったのか？」

「だってーつまんないもーん」

てめえ。

電波がコントローラーを放り投げて寝転がった。

「とうかさ、魔法で俺の傷直せないのか？」

切実な問題だ。

やつは手を振って答える。

「無理無理。そう言う回復系の魔法出来る人あまりいないから」

そういう人が電波の代わりに来てくれないかな。

「じゃあ、入り口の前の穴だけでも」

「そう言うことはカトリーナに頼んでよ。私は殆ど独学だから、知識に偏りがあるのよねー」

「ふーん、何で？」

「ぶつちゃけ一人が好きなのよ」

なんじゃそりゃ。

「所で、いつもの早口モードはどうした？」

「カトリーナの前で言ったらやばいから、普段から注意深く」
電波が青ざめた顔で答える。何者だカトリーナ。

「ところでカトリーナとは知り合いなのか？」
お互い知ってる風だったよな。

「家が近所なのよねー」

「家？」

「そ、天界も人間界と同じで住宅街とか普通にあるわよ。と言う
わけで、もっと小さい頃、ちよつとだけ面倒見てあげてたわ」

「……まるで今と逆だな」

「ぐ……。はいはい、どーせ私なんて、親の七光りで神様になら
せて貰っただけですよーだ」

いじけた電波が体育座りになって畳にのの字を書き出した。
結局カトリーナが何者かは分からなかったが、今回の任務を任せら
れている所を見て、かなり実力があるんだろう。

それよりてめえペンで書くなよ。

「うんっおいしいじゃないかっ」

PM六時。カトリーナが電波の作った料理で、笑ってそう言った。
カトリーナが買ってきた食材。それを食べ物にはうるさいらしい
彼女が調理した。

カトリーナの言うとおり、意外にも電波の作ったはうまい。俺は野菜炒めやらニンジン多めなみそ汁やらを、傷で震える手で何度もこぼしながらも口に運んだ。

そして作った電波はというと、どうやら肉が恋しいようで、ため息をつきながら、ぼそぼそとご飯を口に運んでいた。

そしてカトリーナは傷で震える俺と、そんな電波を交互に見て、静かになった。

ぶつちやけお通夜みたいだった。

「肩揉みなさい」

お通夜みたいな夕飯を食い終えたところで、電波が傷だらけなはずの俺に命令してきました。

「無理に決まってるじゃねえか」

「そんなのやってみなければ「無理だよ」ですよね」

カトリーナが電波を睨みつけて完全に押し切っている。やっぱり立場って重要だよな。

「そうですね、すでにボロが来てる雑巾。略してボロ雑巾なんか役に立ちませんしね」

立場が変わっても電波は電波だ。むかつく。

「と言うか、そもそもお前、俺に触れられて大丈夫なのか？」
気になったことを聞く。

「そこは大丈夫よ。この前あんたが気絶したとき、カトリーナに言われて二人で包帯変えたりしたから。ね、カトリーナ……ナ？」

カトリーナの方を見ると彼女は、あ、という感じで口を押さえていた。

「カ、カトリーナ？」

「ぼつ僕が触れるのは大丈夫なんだけど……」

「けど？」

「神は力がないし……そのっ」

「その？」

「間違いなく影響するねっ」

「あなたは道徳というものを心得てないんですか知識がある者が
ない者に教えるのは当然の義務すよね現代医療の現場でもカス医者
の説明不足が一般市民を泥沼で底なしで惨憺たる状況に突き落とし
拳げ句（以下収まり切りません）」

其の四 地獄の障気(1)

「うめー」

と俺。

「ふはーっ」

と電波。

「あちゅ！ あちゅ！ 熱つつつ！！」

とカトリーナ。

そんな俺たちは、ちゃぶ台を囲み合っている。

そう、俺たちはそれぞれお茶を飲んで寛いでいる。
のどかだぜ。

「熱ちちちちち！」

マジうるせえ。

五分後

「はふーっ、はふーっ」

山場を乗り越えたカトリーナが、火傷気味の舌を何とか冷やしている。

「凄い猫舌ねあなた」

そんなカトリーナを見た電波があきれたように呟いた。

「し、仕方ないひゃろっ。こゝ、こついう家系だっ」

「……どういつ家系よ……」

呆れて後に手をついて、のびをする電波と、舌を冷やすことに夢中なカトリーナ。

なんだかんだ言っただけだ。と言っても、俺は相変わらず体全体痛い……

「はふーっ……うっうるさいっ。もう特訓やるぞっ」
げ。

「八つ当たりですか結局そんなんじゃ墮天使と言われて当ぜ……んなわけないですね」

普段は子供らしさが出ているカトリーナも修行になると怖い。師弟関係を重要視するタイプなのだろう。

どうでも良いけど、そろそろその光で作った剣、首に突きつけんの止めてやれよ。絵としてヤバイから。

と、言うわけでカトリーナから今日のお題の発表だ。

「地獄の障気を吸うんだっ」

なんか一気にレベルが上がった。

「は？地獄の障気？」

電波が口を挟んできた。

「これからの修行には必要だぞっ」

「いや、そりゃ必要だけども。地獄まで行くのって結構かかるわよ

ね。確か天国経由で一ヶ月ぐらい……」

なるほど電波の言いたいことは分かった。そんなに時間が空いたら確実に俺は死ぬだろう。今まで急ピッチで修行してきたのは恐らくそのためなんだろうから。

「だからこいつのことはあきらめて、これからはすでに障気吸ってる私を重点的に修行してよ」

死んどけ。

「君わ、ホントに何も知らないんだな」

カトリーナがため息をついた。

「む、なによ」

「最近ニユースになってたじゃないか。確かに、障気は持ち運んでも地獄から出るとすぐに消えてしまうけど。地獄に住んでる者の血つまり、いつも障気にされされてるそれは障気の代用になるって。画期的な発見だぞ？」

「そんなの知らないわよ。私殆ど人間界のニユースしか見ないし」
人間界通の神はふてくされて寝転がった。こいつ、こんなんばっかだな。

「大体天界のニユースなんか面白くないのよ。全部、神様府が運営してるニユースだし自分たちの自慢ばっかじゃない少しはワイドショー見習いなさいってそれに……」

「と、言うわけで血なら持ち込み可能っ」

ぶつぶつ言い続ける電波を放ってカトリーナは人差し指を一本立てた。そして

「えいつ」

そう言つて人差し指を斜めに振ると、そこだけ一瞬空間が歪んだ、ぐにやぐにやつと。何か気持ち悪いな。

するとそこから透明なコンタクト入れっばい小さなケースが出た。うん、透明だな……………？ 何も入ってないか？

俺がカトリーナの方を見ると、そこには冷や汗と思われる液体を大量に顔から垂れ流す天使。

「ど、どうしよう」

彼女は戸惑つた風に俺の方を見た。

「もっ、持ってくるケース間違えちゃつたっ」

「この墮天使が」

「ひっ！？」

さすがにそりやねーだろ、ここまで修行しかもくたらないに付き合つてやつたんだ。どうせ死ぬなら、そんなことせず死にたかつたぜ。言つまでもなく結構きつかつたんだよボケナスが。

「さすがにそりやないですねーやっぱり墮ちる所まで墮ちた墮天使は役立たずでゴミなダストシートでしたかいやあなたなんか今回の任務を任せた天界の責任は重いですねー一回抗議の電話をしなければいけないこともないこともないですねー」

電波は面白がつてる。いや、お前も結構むかつくんだが。

「……………ひっく……………」

電波の暴言を受けたカトリーナはついに泣き出した。いくら何でも言いすぎだな。

「なっ何よっ。こんなんで泣いてんじやないわよっ……………えっとその、謝るから泣きやんでっつ」

「うああああんっ」

カトリーナが泣き始めたことに焦つた電波が、彼女を抱いてあやすように頭を撫でる。だが、泣き声はどんどん大きくなっていく。

「えっと、だからごめんっつ」

いくら電波が謝つても彼女が泣きやむ様子はない。そんなカトリ
ーナに困り果てたのか電波は俺の方を向いてきた。

「そりゃ、自業自得だつて」

「ぐ……………」

やはり電波にもそう感じる所はあるのか俺に対して何も返せな
い。俺はやれやれ、と、彼女たちから目を離し、何となく入り口付
近を見やった。

「は？」

思わず間の抜けた声が出る。なぜならそこには

「な、何よこれー」

顔があつた。

「ぐぬぬぬ……………」

うん、顔だ。

見ると、黒のロングを垂れ流した小柄な顔が逆さに空中に浮いて
いた。

俺は内心混乱していたが、大声を出すわけにもいかないの、黙
つてそれを見ていた。よくよく観察すると、量の多い黒髪のせいで
分からなかったが、やつ頭の周りには黒い…………空間？

言うならば、そこだけまるで空間が裂けたようだ。明らかにこつ
ち《、、、、》とは違う。

「!?!?」

俺が観察しているとそいつと目があつた。髪で片方の目玉しか見
えない。ホラーだこれ。

そしてやつは俺を見て目を細めた。

だが、

次

の

瞬間、

目を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3778k/>

魔法を覚える十の方法

2010年10月9日12時02分発行